

能「殺生石」と近世演劇

大阪府立大学教授 河合 眞澄

能「殺生石」のシテは、狐の化身である美女玉藻の前である。玉藻の前は鳥羽院に寵愛されていたが、実は「殺生石」にある通り、「天竺にては斑足太子の塚の神、大唐にては幽王の后褒姒」であった野干（狐）がその正体である。天竺（インド）の斑足太子は千人の王の首を取って塚の神に捧げ、自分が大王になろうとして千人の王を捕えたが、仏法によって悟りを得て、王たちの命を助けた。「斑足太子の塚の神」というのは、千人の王の首を供えられるべき恐ろしい神ということになる。しかし俗説では、玉藻の前の前身は塚の神ではなく斑足太子の后、華陽夫人であるとされ、華陽夫人が千人の王の首を取るよう進言したとされている。また、大唐（中国）では、少しも笑わない后、褒姒のために、幽王は戦時でもないのにたびたび烽火を揚げ、その結果ほんとうに戦乱が起こったときには烽火が役に立たず、ついに身を滅ぼしてしまった。褒姒はまさに傾国の美女といえるが、ときには褒姒ではなく殷の紂王の后、妲己とされる。つまり、玉藻の前は、天竺・大唐それぞれで美女の姿に変じていた妖狐であり、日本においてもならびなき美女となった化生の者であった。三国で災厄をもたらした妖狐玉藻の前は、正体を見顕わされて逃げ去り、那須野の殺生石の石魂となる。この説話は、『三国妖狐伝』『三国妖婦伝』として人口に膾炙した。

松尾芭蕉は、元禄二年（一六八九）、「おくのほそ道」の旅で那須を訪れている。黒羽に滞在したときには、「ひとひ郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の

前の古墳をとふ。」とある。さらに、殺生石を見物に出かけて、「殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒気いまだほろびず、蜂・蝶のたぐひ、真砂の色の見えぬほど、重なり死す。」という記述を残している。玉藻の前の古墳や殺生石は、旅先で見物の対象になるような古蹟であった。「那須野の化生の者を、退治せよとの勅を受けて、野干は犬に似たれば、犬にて稽古あるべし」として、百日犬をぞ射たりける、これ犬追物の始めとかや。」と謡曲「殺生石」には、野干（狐）である玉藻の前討伐の予行が犬追物の始まりであるとする起源説話が出てくる。犬追物の跡と玉藻の前の古墳とを続けて訪ねた芭蕉は、おそらく能を介してこの起源説話を知っていたであろう。

「殺生石」の話は、近世演劇では一つの世界となっている。世界とは、登場人物・人物関係・事件などを含めた定型の時代設定であり、本来歌舞伎で用いる概念であるが、浄瑠璃にもこの概念は存在していた。歌舞伎の狂言作者が狂言作りにあたり座右に置いて参照したと思われる書『世界綱目』には、「殺生石」の世界が記載されていて、登場する役名の一つとして「玉藻前」が挙がっている。「本行は謡ひより出る成るべし」という注記があり、ここでいう「本行」すなわち義太夫浄瑠璃は、謡曲を原拠としたという意と思われる。すなわち、歌舞伎や浄瑠璃では、能から「殺生石」の世界を発想したのである。

浄瑠璃では、紀海音に能と同題の『殺生石』がある。これは、享保（一七一六）初年頃、大坂、豊竹座で初演された。ここ

に登場する玉藻の前は、鳥羽院の中宮や茶店を営む女と同じ姿となって、障碍をなす。この「かげのわづらひ」は、近松門左衛門の浄瑠璃『双生隅田川』（享保五年・一七二〇）、竹本座初演）にも見られる趣向である。すでに存在している人物の姿に変じて同じ言動、行動を取るの、本物と偽物を見分けるために思いついた話をさせたり舞を所望したりするのは、歌舞伎の「双面」の趣向との繋がりが見て取れる。また、狐鼠の匂いで狐が正体を現わすところは、狂言「釣狐」を借りている。この浄瑠璃では、玉藻の前は最後に悟りを開いて王土の守護神となり、能「殺生石」とは異なる筋立てである。

玉藻の前が題名に入っている浄瑠璃は、寛延四年（一七五二）に大坂、豊竹座で初演された『玉藻前暇袂』がある。実際には玉藻の前が登場するのは四段目の切のみであり、しかも玉藻の前は鳥羽の院の寵妃ではあるが、狐の化身ではない。この浄瑠璃には、玉藻の前は狐であると陰陽師安倍泰成が占う場面がある。しかし、玉藻の前を狐であるとするのは、悪人をおびき出して退治するための方便にすぎず、事実とは違っている。したがって、この浄瑠璃では、妖狐が禍をなすという本来の玉藻の前の話は陰にひそみ、実際の舞台面に妖狐は登場しない。現在『玉藻前暇袂』として上演されるのは後の改作で、玉藻の前と直接の関係はない。道春館の段のみが手摺にかけられる。これは歌舞伎にも移され、今でも上演される機会がある。

歌舞伎では、当初、玉藻の前は必ずしも美女の姿で登場するものではなかったようである。例えば、正徳三年（一七一三）、江戸、山村座の顔見世狂言「碁、那須野両柱」では、実悪役者の浜崎磯五郎が玉藻の前の靈魂の役を演じた。この狂言を描いた役者評判記の挿絵では、玉藻の前の靈魂は七面七尾の狐であり、弓矢を手にした仏像風に描かれている。玉藻の前が美女の姿では

ない上に、また金毛九尾の狐に固定していない。同様に、元文元年（一七三〇）、江戸、中村座の顔見世狂言「国富殺生石」では、やはり実悪の中島三甫右衛門が玉藻の前の怨霊を演じている。

時代が下ると、玉藻の前を中心とする狂言に四世鶴屋南北作『玉藻前御園公服』がある。これは文政四年（一八二二）に江戸、河原崎座で上演され、三世尾上菊五郎が玉藻の前を演じた。三国を転々とする妖狐の活躍する話は、これが初めてというわけではなく、以前から初世尾上松助らによって舞台化されていた。玉藻の前の宙乗りや水中での早替りなど、いわゆるケレンの演出によって人気を博した。現存する台帳で確認すると、玉藻の前はその身から夜陰に光を発することを怪しまれ、神鏡の威徳によって正体を見現わされる。十二単姿の玉藻の前は、「金毛九尾白面の妖狐の姿」となつて破風を蹴破り、黒雲に乗って宙乗りで花道の上を引つ込んで行く。この時期には、玉藻の前は美女かつ賢女という能の「殺生石」の設定通りのものとなっている。空中を飛翔する玉藻の前は、近年でも南座において中村兒太郎（現中村福助）が、国立劇場において当代の尾上菊五郎が演じている。

以上のように、能の「殺生石」の影響下に、近世演劇では数多くの浄瑠璃や歌舞伎狂言が作られた。近世演劇に登場する狐は、「芦屋道満大内鑑」の狐葛の葉や『義経千本桜』の源九郎狐のように、親子の情愛を尊び人間を助ける善狐がほとんどで、「殺生石」の玉藻の前のような悪狐は珍しい。「殺生石」は話自体が三国にまたがり規模雄大であること、異国の風俗が舞台上で見られること、ケレンの演出と結びついたこと（からくりも用いられたであろう）等々が、今に至るまで演劇としての命脈を保っている要因に違いない。

今回の廣田幸稔師は、「殺生石」を女体の小書で演じられる。野干である石魂に揺曳する玉藻の前の面影に注目したい。